

ロシアのウサーチバ（貴族屋敷）文化研究序説（一）

坂内 徳明

序章 ロシア文化の基層としてのウサーチバ

一 ロシア文学の原風景

二 ウサーチバとは何か

第一章 ウサーチバ研究の学史的概要

一 ロシア貴族文化史研究の現状とウサーチバ文化への関心

二 研究前史

三 十九世紀末まで（以上 本稿）

四 ロシア革命期前後

五 一九二〇年代、ならびにその後

六 ペレストロイカ後

七 今後の展望

第二章 ウサーヂバ文化の一現象としてのアンドレイ・ポロトフ

一 記憶の目覚めるトボス（書斎・屋敷・庭園）

二 個人史から家族史へ

三 菜園のミクロコスモス

四 博物学の可能性とマクロコスモスへのまなざし

第三章 ロシア近代の成立とウサーヂバ

一 ウサーヂバと民衆の姿

二 農奴インテリゲンツィヤの変容

三 「民芸」の誕生

四 ウサーヂバから見たロシア民俗文化史

序章 ロシア文化の基層としてのウサーヂバ

一 ロシア文学の原風景

一九六九年のはじめ、ひとりのアメリカ人観光客が当時のレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）近郊のとある土地を訪れた。その折に撮影された写真二三枚が、オーストラリア在住のアメリカ人研究者の手を経て作家のウラーミル・ナポコフの手に送られた。作家の生誕七〇年記念としてである。ナポコフはスイスのモントルーからこの研究者に宛てて礼状を送っているが（同年四月二五日付け）、そこで作家は自分の誕生日（ナポコフの誕生日は

露暦で四月一〇日、グレゴリオ暦で四月二二日、ただしアメリカ時代には二三日とされたことも多い。また、洗礼日の四月二六日を誕生日とされることもあった）を憶えてくれていて、その日の直前に到着するように送ってくれたこの粋な計らいに感謝しただけでなく、さらに、写真とその裏面に書かれた解説の文体と語調に強く反応している。書簡でナボコフは次のとおり書いている、「それは、私の少年時代と老境をつなぐ類いまれな鎖の輪であります。寓話化された悲しい土地の、そこに住む未知の人々の感性豊かな精神に、私の諸作品が浸みわたった結果、その輪はつくり出されたのであります」<sup>(1)</sup>

ナボコフは自分の本に載せるために二三枚の中から六枚の写真を選び、新たに解説を付けた。邦訳のある『ナボコフ書簡集』にはこの解説部分も収められているので、写真に撮影された土地の名前だけでなく、ナボコフ自身の土地にたいする深い想いを十二分なまでに知ることができる。それによると、写真は全体が「サンクト・ペテルブルグ地域のナボコフの土地」であり、具体的な撮影対象は「ロジジュストヴェノ荘園邸宅」、ナボコフの母方叔父のルカヴィシニコフ家の納骨礼拝堂、ヴィラにかつて建っていた両親の領地屋敷、ヴィラ・パークの中央並木道、父方祖母の領地バトヴォ、バトヴォ・パークの中央並木道であるという。撮影されたそれぞれにたいして、ナボコフはかつての記憶をたどりながら、過去の風景や建造物と現状、家の歴史、さらには文学史的なコメンタリー（例えば、かれ自身の仮説によれば、バドヴォの並木道で一八二〇年にプーシキンがルイレエフとピストルで決闘をした、など）を記している。そしてナボコフはかれの自伝である『記憶よ、語れ！』の参照をたびたび求めるのである。<sup>(2)</sup>

作家ナボコフはペテルブルグ市内に生まれたが、その幼少青年時代、特に夏の時期を中心に近郊の領地屋敷で多くの時間を過ごした。最初がいつかは不明だが、誕生とほぼ同時であったにちがいないとすれば、一八九九年生まれの彼が体験した帝都ペテルブルグ近郊の田舎生活は十九世紀末から二〇世紀初頭のものだったことになる。かれが向か

った近郊の場所とは、かれ自身の半世紀後の写真解説にも見られるとおり、サントクト・ペテルブルグの南方に位置する、ロジジェストヴェノならびにヴィラ、バトヴォの名前を持つ土地である。ナボコフが写真解説を書いた時点では、ロジジェストヴェノの邸宅跡には廃屋が一つ残るだけで、ヴィラには基礎を除き建物は何も残っていない状態だったが、ロジジェストヴェノでは建物が修復されてナボコフ記念文学史博物館となった（ただし一九九七年に焼失）。

ロジジェストヴェノ、ヴィラ、バトヴォはペテルブルグ市内の真南約七〇キロメートル（彼は五〇マイルと書くが、それに従えば約八〇キロメートル）に位置する。<sup>③</sup>『記憶よ、語れ！』の中にナボコフ自身の手による略図が収録されているこの土地での経験は、『記憶よ、語れ！』（一九五一、一九六〇年）や『向こう岸』（一九五四年）に見られるとおりである。それは、田園生活のリアルな描写ではまったくなく、いかにもナボコフらしい文体とイメージによって綴られたものである。

ナボコフが自らの幼年時代の意識の目覚めについて述べるのは『記憶よ、語れ！』の冒頭第一章においてである——「閃光となつてときどき間欠的にゆっくりと光り始める。それから間隔がだんだんつまってきて、それが記憶のきらめく断片になり始める。だがまだ曖昧な記憶でしかない。そうした状態の中で、自分が自分であり、両親が両親であることを最初に意識したのは「両親の年齢を自分の年齢に結びつけて認識したとき」だった。自分が三歳、そして三三歳の父親と二七歳の母親という年齢を考えたとき、「私になにかが起きたのだ。精神が衝撃で恐ろしいほどふるい立った」。それは、「私たちのいちばん遠い祖先の脳のなかに初めて内省的意識が誕生したのは、まちがいない、時間感覚が誕生したのと同時だったにちがいないからである」と説明される。この衝撃と震えをナボコフは二度目の洗礼を受けたかのような、と表現する。そして、両親の年齢を再びくり返しながら、その二人への記憶を「その瞬間私は私の左手を握っている柔らかな白とピンクのドレスを着た二十七歳の存在が私の母で、私の右手を握っている固

白と金色の軍服を着た三十三歳が私の父なのを知覚していた。同じ速さで歩いていく二人の間で、私は大股で歩き、小走りに走り、また大股で歩いていた<sup>(4)</sup>。手のぬくもりと服の色彩など細部にたいするナボコフの直観が鮮やかに發揮される瞬間と場所が、ここに見られる。

この「事件」が発生したのは、ナボコフ三歳の時とあるのをそのまま受け取るとすれば一九〇二年のことである。しかも「たぶん真夏で、父の誕生日をみんなで田舎の本邸で祝っていたときだったにちがいない」と明確に記され、それは一九〇二年七月二一日、と書いてあることから、この日こそがナボコフの意識の誕生日となったとしてよいだろう。そして「その日、私はこの精神生活の誕生を心から祝っていたような気がする<sup>(5)</sup>」と書く時、そこにはかれの生と自意識への絶対肯定的なインセンティブが明確に示されている。

一九一四年の夏の田舎生活も十二年前と同様に大きな衝撃をもたらした。かれ自身、それを「詩作の狂気が初めて私を襲った」とする。「雨宿りに駆け込んだ小屋、その内部とそこからの自然風景、到来した雷雨とその後の自然ならびに周囲の変化——その中でナボコフに最初の詩が生まれた（「語れ」改訂版第十一章）<sup>(6)</sup>」。もっともその時の詩「雨が通り過ぎた」は、ただちには書かれず、多くの詩が書かれた後の一九一七年五月に記された。

このように見てくると、ナボコフが自身の意識に目覚め、また、詩作への道を自ら開いたという点で、ヴィラならびにロジジュストヴェノという場所はきわめて重要な役割を果たしたことは明らかである。半世紀以上も経過して、いきなり送付されたかの地の写真を目にした時の強いリアクションはあまりにも自然と言わねばならない。自我覚醒と自然・世界・時間・他者への距離と感覚、さらには文学的インスピレーションと想像力を獲得する上で、このペテルブルグ郊外の場所はたんなる条件としての背景や環境ではなく、決定的な意味を持つクロノトポスとなったと言っ過言でない。この郊外の地は自伝のみならず、『賜物』（一九五二年）や『アーダ』（一九六九年）など多くの作品

でも描かれるが、伝記『ウラヂーミル・ナボコフ』の著者であるブライアン・ヴォイドは、ナボコフ自身の「ヴィラとその周辺は地上のどこよりも私が愛する場所である」という言葉を引きながら、「ナボコフは実際的には彼のロシア生活の多くを家族のペテルブルグで送ったにもかかわらず、ヴィラはつねに『家』<sup>(1)</sup>」としておりである。そこはナボコフ文学の原風景であった。

こうした都市近郊の場所を自己形成にとって重要な契機と見なすことは、むしろナボコフのみに特有のものではない。同時代のそれらの生活を自ら体験し、そこで自身の精神形成をしたばかりでなく、綿密に記憶に残していた、例えばイヴァン・ブーニンやアントン・チェーホフ、さらにアンドレイ・ペールイ、コンスタンチン・バリモントといった作家たちは、生年こそナボコフとは多少違っただけであつたとはいへ、その数多くの作品で都市近郊ないし時に農村の領地屋敷の光景を登場させているとおりである。<sup>(8)</sup> しかもそこには、たんに農村や領地生活での見聞や体験ではなく、時代精神として昇華した経験が描かれているのであり、それを通して十九世紀末から二〇世紀初頭のロシア文化のきわめて特徴的な一面をしつかりと窺い知ることができるのである。

もっともロシア文学史を見直すならば、この問題はより大きな広がりを持つ。すなわち、この時代に限られたことではなく、十八世紀末から十九世紀半ばにかけて「成立」し、その後大きく展開していくこととなるロシア文学の基礎構造と深く関わっているはずである。各時代の多くの作家が、都市のみでなく都市近郊ならびに農村に一時的にはあれ「住む」地主貴族であり、そこでの個人的・即物的な環境や体験としてでなく、それらを経験化することで自らの文学を創造したと考えるならば、都市近郊の領地屋敷での生活フィット(習俗)はたんなる描写対象や作品展開の背景、あるいはリアルな自伝のエピソードの場所にはとどまらない。ロシア文学はその誕生と存立をになう出発点をそ

ここに置いていたとも言えるのである。ここを「静寂と労働と靈感の憩う場」（一八一八年）と言つてのけたアレクサンドル・プーシキンに始まり、セルゲイ・アクサーコフ、イヴァン・ツルゲーネフ、レフ・トルストイなどを始めとする十九世紀ロシア作家の数多くの作品が郊外の領地生活を「主題」として選び、そこでの個人体験を経験化する中で書かれたことを考えるならば、十九世紀ロシア近代文学はまさしく領地文学と見なすことができる。しかも、この領地文学を生み出した領地屋敷は二〇世紀初頭にかけての時代に急激に変貌せざるをえなかった。そしてその多くが消滅していったことからすれば、ナボコフ、ブーニン、チェーホフらは十九世紀ロシア領地文学の最終到達点を示していると言つて間違いない。チェーホフが『桜の園』の最後で、桜の木を切る斧の音に観客と読者にたいして新時代の到来を伝えようとしたように、これらの作家は、それぞれ別個に自らの作品でこの「消え行く」領地生活を一種のノスタルジーも込めて描きつつ、一つの大きな時代転換を予感させようとしたのである。

## 二 ウサーヂバとは何か

これまでの記述の中で多少のじれったさを感じながら、都市郊外の農村や近郊の領地屋敷、あるいは荘園などといった言葉を使ってきたが、それらはすべてロシア語で *ycадьба* (*usad'ba*、ちなみに英語訳は *country estate*) と表現されるものである。その具体的な語義にはじまり、文化史的意味論に関しては以下で述べるが、さしあたりここでこのウサーヂバの概説をしておくのと次のおりになる。

ウサーヂバとは、十六世紀半ばから一九一七年革命の時期までモスクワ近郊や中部ロシアを中心としてウクライナ、ベラルーシなどに多数存在した領地内の貴族屋敷を意味している。その数は、最新のウサーヂバ研究が算出した成果によれば、ヨーロッパ・ロシア地域だけでも一五五〇年に一万六千、一六〇〇年に一万七千、一七〇〇年に二万三千、

一七三七年に三万二千、一八〇〇年に三万五千、一八五八年に五万、一八七七年に五万九千、一八九五年にピークの六万千、そして一九〇五年に五万五千、一九一七年十一月に發布された「土地に関する布告」<sup>(9)</sup>によって廃止される時点では四万を数えたという。

中世の大貴族は世襲ならびに報奨としての恵与により土地を所有したが、ピョートル大帝の近代化以後は新興貴族や中小貴族も新たに領地を獲得し、屋敷において家庭を中心とする独自の貴族文化を發展させた。特に一七六二年に發布された貴族自由令はその動きを加速化し、十九世紀半ばにいたるウサーヂバ文化の黄金期が実現することになる。ウサーヂバには宮殿規模の大きなものから簡素な小邸宅までが含まれる。しかも重要な特徴として強調すべきなのは、ウサーヂバがたんに土地所有の対象や農民支配の場所としてではなく、邸内にある建物や庭園からインテリアや家具調度、さらに遊びや趣味にまで及ぶ個人としての地主の生活文化全体を指すことである。その意味で、ウサーヂバなしにロシア近代を語ることは不可能であろう。ロシアの近代化を物質・精神文化の両面で都市から田園へと浸透させる回路ならびに場であり、貴族の知的活動を展開し、かれら相互の活発な交流やサロンの形成によってインテリゲンツィヤの誕生を準備し、しかもかれらが民衆の文化と出会い、衝突しながら、「ロシア的個性」を獲得していく場となつたからである。代表的なものとして、シエレメーチェフ家のクスコヴォ、アンドレイ・ポロトフのドヴォリャニーノヴォ、ツルゲーネフのスパスコエールトヴィノヴォ、レフ・トルストイのヤースナヤ・ポリャーナ、チェーホフのメリホヴォなどが知られているが、上記の全体数から見ても、これらはほんのごく一部にしか過ぎない。十九世紀文學については先に述べたとおりであるが、文學以外にも美術、音楽などロシア芸術の分野全体にわたって「ロシア的」作品が生まれる上で決定的な影響をもたらした。芸術家たちが幼少時代のみならず、成長後もそこで過ごし、創作活動を行った場所であるだけでなく、つねに自らの生の検証と新たなエネルギーを喚起させるといふ意味で、ロシ

ア文化全体の基層とも、または通奏低音とも呼べる場所である。しかし、ソビエト国家・社会の成立後は、革命前のウサーヂバ所有者の多くが貴族であったことからイデオロギー的弾圧とそれにもとづいた破壊が広まり、荒廃するに任されてきた。ようやくペレストロイカ開始以後の近年になり、文化史上のウサーヂバの重要性が再評価され、ソビエト時代に各地に放置されていた施設の修復・再建が行われ、統合的な研究がきわめて活発に進んでいるのが現状である。そのことの研究史面からの考察が本稿第一章のテーマとなるはずである。

ウサーヂバという言葉そのものについてふれておく。ソ連邦科学アカデミー・ロシア語研究所編『現代標準ロシア語辞典』（全十七巻）によれば、一、庭、菜園などが付き、別個の機能を持つ産業用建物と住居の総体（主に農村地帯にある）、二、ソフォーズ、コルホーズの生産・住居センター、三、個人の産業用土地区画。また、辞書上での初出は、ヴェイスマンノフ・レキシコン（一七三二年）の *усадба* 『ロシア・ツェラリウス』（一七七一年）の *усадба* の形である。<sup>(9)</sup> また、ザルービン、ロジエツキン共著『露和辞典』（一九八八年）には、一、宅地、二、集落地、三、敷地、四、住宅附属地、とあって、ここで問題としている貴族などの領地と屋敷に関しては、刊行がソビエト時代のためか言及がない。一般のロシア人にとっては言わずもがなであったのだろうか（ただし、近年きわめて多くの種類が刊行されている『死語古語辞典』には、貴族領地の屋敷の意味がはっきりと記されている）。

これらソ連時代の辞書からも、ウサーヂバという言葉は、いくつもの建物の集合体と、それらが立つ土地・敷地の双方を意味することが分かる。土地、所有地という意味に関しては、中世から存在したロシア語として *вотчина*, *поместье*, *имение*, *владение* などが知られており、時としてウサーヂバと明確に区別されず、同義語として使用されることも多い。しかしこれら同義語にそれぞれ「相続地」「知行地」「領地」「所有地」といった訳語を当てると、これらはどれも土地そのものを第一義とする点でウサーヂバとは決定的に異なっている。もっとも、十六世紀以



ウサーヂバという現象は特に十八世紀以降のロシア近代文化の展開にとって重要なファクターとなっていた。この文化現象はたんなる芸術分野にとどまることなく、より広く文化全体に関わっており、その点でロシア近代の成立と展開を考察する上で不可欠な領域である。それは近代ロシア文化を考察する上でのキーワードの一つとなっていたと言える。しかもこうした重要性が十分理解されることなく、特にソビエト時代には、表層的に見れば見逃されたり、あえて無視されてきたことは指摘しなければならない（例外は、ニキータ・ミハルコフの多くの映画作品）。

近年、本国ロシアならびに欧米においてウサーヂバ文化の全体像を正面から取り上げるべく多様な研究が相次いで発表され、目覚ましい成果をもたらしていることはきわめて注目すべきである。ウサーヂバ研究をリードしているのが、一九二〇年代に目覚ましい活動を行っているながらも、三〇年代に壊滅させられ、ようやく一九九二年に復興された「ロシア・ウサーヂバ研究協会」である。協会機関誌が分厚い論文集として刊行され（第一冊（通巻十七号）が一九九四年、第七冊（通巻二三号）が二〇〇一年に出版）、理論的・実証的研究論文が毎号掲載されるほか、詳細な活動報告ならびに地方博物館のウサーヂバ復興運動も含めた詳細な活動状況についても多くの情報を提供している。また、これまで芸術史と郷土誌に傾斜してきたウサーヂバ研究にたいして、ロシア史研究所を中心とする歴史学からのアプローチも活発化し、その成果として同研究所の編纂になる論集『十六—二十世紀ロシアにおける貴族と商人の農村ウサーヂバ。歴史的概説』（二〇〇一年）が出版されたことはウサーヂバ研究とそれに関心する社会世論の動向にとって画期的な出来事であった。また、二〇〇二年五月にはモスクワの国立歴史博物館において「祖国ならびに世界文化の現象としてのロシア・ウサーヂバ」と題する学術シンポジウムが開催されている。さらにこのシンポジウムを受けたい形でロシア史研究所が刊行する定期雑誌「祖国の歴史」（二〇〇二年第五号）には「ロシア・ウサーヂバとその運命」と題する円卓会議が掲載されており、そこには十八名の参加者があった（メンバーは、ロシア史研究所をはじめ

として文化省国立芸術学研究所、文化・自然遺産研究所、ロシア国立人文大学、モスクワ・エネルギー研究所、モスクワ・クレムリン博物館、ベルゴロド国立大学、ロシア文化学研究所、「修復特別プロジェクト」研究所、国立歴史保護区「レーニン丘」などきわめて多くの機関所属者から構成されている。円卓会議の前文に明らかなどおり、上記論集も合わせたウサーチバ研究のアクチュアリティを支える共通認識とは、これまでおこなわれてきた芸術学、文化研究、歴史学、郷土学などの個別分野の成果をインテグレーションすることによってウサーチバ研究を独立したデイスプリンとして形成する可能性を探るという点であった。<sup>(12)</sup> ここには、現代文化の中でウサーチバという対象ならびにその研究をめぐる状況を明確に見ることができるといえる。

また、本国ロシア以外でも注目すべき仕事が行われた。アメリカ人のプリシア・ルーズベルトによる、豪華な写真を多数収録した堂々たるモノグラフ『ロシア・ウサーチバの生活。社会・文化史』（一九九五年）がそれであり、ソ連邦・ロシアにおけるウサーチバへの関心動向の「急変」とはむしろ関係なしに、文字どおり研究者自身の芸術学的関心と問題設定、さらに永年にわたる地道な調査の成果である点が大きな意義を持つ。ロシア本国では生まれ得ない積極的な問題関心が高く認められる仕事であり、ロシアでもそのタイムリー性と合わせて広く反応を起こし、大きな評価を得た。こうした近年のウサーチバ研究の動向の詳細に関しては次章の後半部で述べたい。

それらの現在の関心とはどこにあるのか。革命前の「豊かな」ロシア文化へのノスタルジーだと言い切ることができるのだろうか。かつて筆者は、現代のロシアにおける民衆文化史研究の動向の全体像を概観的に素描する中で、関心の底にあるのはたんなるノルタルジイでもロマンチズムでもないことを指摘したことがあるが、ウサーチバについても同様のことが言えるだろうというのが本稿の出発点である。

筆者の関心はロシア近代文化史の枠内でウサーチバを見ることにある。特に、民衆文化との関わりを含めたロシア

近代の成立過程全体の中でその文化（史）的意味をとらえることがねらいである。その際、十八世紀後半・末から十九世紀前半にかけての時期が大きな転換期であり、その時期にロシア文化がリアリティとしてだけでなく言説としても成立していったと仮定するならば、その過程と並行して誕生し成長したウサーヂバは文化史上で欠かすことのできない重要な現象となるはずである。筆者は、一方で「民衆の発見」運動が、他方でウサーヂバ時空間の成立がこの十八世紀後半・末から十九世紀前半への転換期の構成条件であると考える。ロシア近代民衆文化史はこれらの両輪から書かれるべきであろう。本稿は冒頭にその全体像を記したウサーヂバ文化論のための資料学的オリエンテーションを中心とした学史の素描となる。

## 第一章 ウサーヂバ研究の学史の概要

### 一 ロシア貴族文化史研究の現状とウサーヂバ文化への関心

一九九一年のソ連邦崩壊以後の現代ロシアにおいて、ごく表層的なマスコミ報道による社会「混乱」や「先行き不透明」との一般的な論評や世論にもかかわらず、ジャーナリズムも含めたアカデミズムはきわめて活発に胎動して現在に至っている。本稿筆者の関心から見たアカデミズムの分野に関して見た場合、それを民衆文化史研究と名付けるならば、この分野において近年多くの目覚ましい成果が発表されている。その研究動向の一部をすでに筆者は論文として発表した<sup>(13)</sup>。その中で筆者は、一九九九年の夏から秋にかけてサントク・ペテルブルグ市内の旧ストロガノフ宮殿で開催された「ロシアの造型美術における遊戯と情熱」展に関して、それを現代の民衆文化史への関心と関連させながら、その関心が「ソ連邦崩壊後のいわゆる混乱と社会不安からの逃避や過去へのノスタルジーの表出、あるいはロ

シア・アイデンティティ喪失状態からの一応の脱出としての「余裕」または「ナショナル化」によるものでないこと述べた。そして、この展覧会が孤立して行われたのではなく、近年活発化している習俗史を中心としたロシア民衆・民俗文化研究の展開との関連性の中で行われたこと、そしてこれらの成果が「革命前からの伝統、ならびに一九六〇年代に大きく発展した民族・民衆文化研究の成果を十分に咀嚼することによって実現したこと」を指摘した。その詳しいディスクリプションは先の論文で行ったが、ここでは紙幅の理由から民俗学・民族学、そして習俗史研究の一部を扱ったのにとどまり、残された貴族文化論ならびに遊戯・娯楽を中心とする民衆文化史については別稿とすると記した。

ソビエト時代に貴族(史)研究が正面から取り上げられなかった理由に関しては改めて書く必要はないだろう。特に歴史学研究を中心に、革命前のロシア社会全体における貴族階級が果たした役割に関してはイデオロギー的理由によってタブーとされてきたと考えてよい。しかしながらこのような限定の枠内でも、いくつかの研究が重要な視点を提起していたことは忘れてはならない。

二つの例をあげておく。ソ連邦歴史研究所(現ロシア史研究所)文化史部門の編になる『ソビエト著者の研究に見る九—十八世紀ロシア文化』(一九九〇年)は、タイトルに見られる時代区分にたいして行われた文化史研究の成果を革命後から一九八四年までのペレストロイカ直前の時期に限定して概観したものである。ソビエト期の研究を対象とするとはいえ、この種の史学史(ヒストリオグラフィ)の着実さと手堅さを明確に示すものとしてすぐれた仕事として評価される。ここには第四部として、アレクセイ・コプイロフ論文「絶対主義開花の時代のロシア文化」が収録されている<sup>(14)</sup>。論考全体は十八世紀文化史の研究史概説として、社会思想、啓蒙、学問、文学、芸術の五章から構成される。この論考が全体として見た場合、十八世紀文化史を貴族史としてとらえる視点に脆弱なのはやはり時代的制約

によるのだろう。しかしながら、膨大な研究蓄積のフォローから明らかにすることは、貴族（史）研究や貴族文化そのものを正面から取り上げた研究がソビエト期には存在しなかったとはいえ、十八世紀研究が、特に文化史の分野においてはイデオロギー的制約が比較的希薄で、政治性から「自由」であったために多くのすぐれた成果を生み、それが一九八〇年代の「新しい」研究へと継承されたということである。ウサーヂバに関しても、芸術史の分野で着実な仕事が続続していたことが紹介されており、本稿においても後にあとづけることになる。

もう一例は、一九六〇年代以降、十八世紀ロシア文化史研究をリードしたモスクワ大学のボリス・クラスノバエフの仕事である。かれの研究成果は全体として、対象となる十八世紀が求めるとおり、歴史、経済、思想、文学、演劇、ジャーナリズムなど広範な分野にたいして十分な目配りのきいた、しかも文化史固有の問題設定にも周到な配慮を忘れないすぐれたものである。その基本的コンセプトはかれが責任編集者となった『十八世紀ロシア文化概説』（全四冊、一九八五—一九九〇年）に明確に示されているが、さらにかれの単著である『十七世紀後半—十九世紀初頭のロシア文化』（一九八三年）においてより具体的に記述されている。ここでは、十七世紀後半からの転換期の中で十八世紀のピョートル改革をとらえ、中世文化の危機から新しい文化が誕生していく過程を多くの分野にわたる具体的な現象や人物の活動を通して述べる。ここには、いわゆる「文化」ではなく、政治、社会、経済、宗教、都市、思想、美術、教育、学問など時代全体の社会現象の総体を「文化」としてとらえようとする意欲的なアプローチが見られるが、ここには一九六〇年代に誕生していた文化学（культuroлогия）の影響が明確に見られるのである。

クラスノバエフは十八世紀以降の貴族文化にたいしてアプローチする際的前提として基本概念の点検を行う。すなわち、対象として貴族を取り上げる上で「貴族文化」（дворянская культура）と「貴族の文化」（культура дворянства）とを原理的に区別しようとする。仮に訳語を当てたが、それでは十分な理解ができないと思われるので語

結合について補足するならば、前者は「貴族的」という形容詞による定語的説明、後者は後置した名詞「貴族階層」の生（属）格支配による属性説明である。クラスノバエフによれば、後者は「より広く、一般性の契機を持つ概念」であり、前者は「他の階層、社会集団と対立する階層としての貴族の存在と活動と関連した現象を理解する概念」であるという。この説明をいかに理解するかの問題は重要である。すなわち、後者は一般的使用に傾きながらも貴族集団を階層として固定的にとらえる方向をはらみ、一種のイデオロギー的レッテル化をも視野に入れたものと言える。その意味から考えるならば、実体的で限定的であろう。それについて前者は、多少とも漠然とした形容詞使用による説明により、むしろその一般性を逆に問題化し、「貴族的」とは何かを問いかけて、貴族的なるもの本質を問いかけてやうとする上で有効であろう。その意味でより重要な、問題提起的、解釈的な概念となっている。このように考えるならば、ここには後者の概念に見える、特にマルクス主義的な社会経済史を前提とする、固定的でステイックな貴族観からの「解放」の試みの一端が読み取れるとは言えないだろうか。こうした意味から、文化史という対象ならびに理論的枠組み、そして十八―十九世紀貴族文化というテキスト理解そのものをソビエト時代の中で精緻化しようとしたクラスノバエフの試みは評価されてよい。

むしろ、この間に貴族史研究を代表する仕事として、セルゲイ・トロイツキイの『十八世紀のロシア絶対主義と貴族』（一九七四年）に見られるような成果もあった。しかしながら、やはり全体として見ればきわめて実証主義的方向に大いに傾斜しているという印象は拭えなかった。むしろ、欧米での仕事がそれを補完していたとしてもよい（その例は、マーク・ラエフ『ロシア・インテリゲンツィヤの起源。十八世紀の貴族』（一九六六年）、ジョンズ『ロシア貴族の解放』（一九七三年）のような実証的かつ問題提起的な成果である）。また、特に文学・社会思想を中心とした十八世紀文化研究も、一九三〇年代以降多くの成果をもたらしてきたことも忘れるべきではない。当初の直接的契

機としては、例えばアレクサンドル・ラヂーシチェフの思想・文学作品の「革命的」読解から始まったとは言え、そこからユーリイ・ロートマンらのテクスト研究が登場することになったのであり、その間の「連続性」を見のがすことはできないだろう。しかし、全体からすれば十八世紀貴族研究が正面から本格的に行われたとは言えず、量的に不十分だったことは認めざるをえない。

しかし近年になって、従来のイデオロギー的枠組みから完全に解放された形の貴族史研究が陸続と発表されるに至っている。ボリス・ミローノフの名著『帝政期ロシア社会史』(一九九九年)は貴族のみを扱ったものではないが、社会階層としての貴族をニュートラルに社会史的な側面から記述していることに明らかなように、貴族研究にも大きな進展と新たな方向性が見られるのである。さらにいくつかの例をあげるならば、ボリス・ソロヴィヨフによるロシア史全体の中で貴族を起源、名称、役職、官位などについて概説した『ロシア貴族とその傑出した代表者たち』(二〇〇〇年)、同『ロシア貴族』(二〇〇三年)は基本的情報の整理として役立つ。また、ヤロスラフ・ヴォダルスキイ『十七―十九世紀前半ロシアにおける貴族の土地所有』(一九八八年)は社会経済史による新たな成果である。さらに、十八世紀末から十九世紀前半の貴族の「黄金期」をその時代の習俗に焦点を当てて記述したノンナ・マルチェンコ『愛すべき過去の予兆 プーシキン時代の道徳と習俗』(二〇〇一年)も力作である。もっとも、この分野に関してはユーリイ・ロートマン『ロシア文化談話。ロシア貴族の習俗と伝統』(一九九四年、邦訳『ロシア貴族』)、同じくこれの概説的な仕事「オネーギン時代の貴族の習俗」(『プーシキンのロマン “エヴゲニイ・オネーギン”。コメンタリー』(一九八三年)への序論として書かれたもの)が基本的な成果としてすでに存在していた。

一般的に見れば、ロートマンらの関心に明らかなとおり、十八世紀後半から十九世紀初頭・前半にかけての時期が貴族文化の全盛期であると言えるが、特にその中でも一貫して十九世紀前半に焦点を当てて仕事をしてきたのが、レ

ニングラード大学のナターリヤ・ヤコフキナである。啓蒙、出版、文学、美術、演劇など手際よくまとめたすぐれた教科書『十九世紀前半のロシア文化概観』（一九八九年）では、貴族文化への視点はいまだ明瞭には出されていないが、最新の仕事『十九世紀前半のロシア貴族。習俗と伝統』（二〇〇二年）はタイトルからもはっきりと打ち出されているとおり、文字どおり貴族文化史を構築するための基礎的な仕事である。「主人と奴隸」「首都とウサーヂバ」「娯楽と熱中」「社交界のサロン」「教育」などの各章に沿ってバランスの取れた記述がされている。また、オリガ・ムラヴィヨヴァ『ロシア貴族はいかに養育されたか』（一九九八年）は家庭教育を中心とした貴族教育社会史入門として読める。

古文献学（アルケオグラフィ）の代表的研究者であるシグルト・シュミット『十七―十九世紀三十年代ロシアの高貴身分の社会的自己意識』（二〇〇二年）は一九六〇年代から二〇〇〇年までのかなり長い期間に書かれた十八世紀史論の集大成的論文集である。本のタイトルと同名の収録論文は一九九一年にパリで開催された国際シンポジウムでの報告にもとづくものだが、そこでかれは十八世紀貴族を十八世紀のなかで論じるのではなく、十六―十七世紀も含めた大きな時間枠でとらえようとする。十八世紀に新たに勃興した貴族ドヴォリャニンをそうした時間軸のなかに置きながら、かれらの貴族意識あるいは自己意識の誕生とその変遷を、プーシキンやカラムジンをはじめとする貴族インテリゲンツィヤの著作をテキストとして論じている。一方でロートマンらの仕事への目配りも忘れず、新たな精神的な方法を探る仕事として高く評価できる。

近年の貴族文化史研究でおそらく最大の成果の一つと言えるのは、E・マラシーノヴァ『十八世紀最終第三期ロシア貴族エリートの心理』（一九九九年）であろう。ここで著者は、十八世紀末の貴族の意識を五つのパラメータ（教育・ヨーロッパ化の程度、啓蒙思想への感受性、貴族中心層との関係、専制ならびに半官的イデオロギーとの関係、

民族意識の発達程度）でとらえようとする。そのため、四五人一八〇〇通の書簡を主なテキストとして選びだし、その分析を通して、貴族の個性のタイプ、皇帝像、理想探究などを明らかにしようとするが、これまでの貴族研究には見られぬ新たな精神的方向性を示している。<sup>17</sup>また、上記した、一九九一年にパリで開催された国際シンポジウムはソ連邦崩壊直前に開催された意味も合わせて象徴的な「事件」であった。

このように見てくると、現在のロシア文化史研究にとって貴族（史）研究が、個別貴族の一族史の研究や、特にロシア革命前の過去へのノスタルジック的な関心の有り様といった枠を越えてより大きな方向性を志向していることがわかる。そしてこのことがウサーチバ研究の急速な展開と密接に関連していると言ってよい。

## 二 研究前史

ウサーチバ研究はいつ始まったのだろうか。そもそもウサーチバ学という独立したアカデミック・ディシプリンはこれまで存在しえたのだろうか。上で二〇〇二年に開催された円卓会議に関して言及した際に述べたとおり、現在、ウサーチバ研究を一つの独立した学問領域とすべしという呼び掛けが行われていることからすれば、ようやく近年に至って、ウサーチバ研究が本格的に論じられる段階に突入しているのであろう。しかしながら、後に詳しく述べるように、ウサーチバ学・研究 *Уса́рчи́ба* というターム自身は一九二〇年代に提唱されて使われたが、使用開始から十年足らずで消滅した。革命直後の時期にリアリティならびに対象としてのウサーチバの場・空間それ自体が解体され、その急激な崩壊過程と同時進行する形で学の提唱がなされたこと、そしてこの学の萌芽もきわめて短期間に摘み取られていったという関係性と展開は重要である。というのも、学ならびにその対象、そして時代という三者から成る全体を学史としてとらえ、それを記述する上での好例となるはずだからである。これに関しては後に述べるこ

ととなるだろう。ここではまず、ロシア革命期以前におけるウサーヂバ研究の有り様を記述する。それはクロノロジカルに、ピョートル改革以前の十七世紀半ばにおける外国人旅行者の記録、十八世紀前・後半における都市郊外の記録、ウサーヂバも含めた地誌的関心が研究的色彩を帯びた十九世紀後半以降、そして特に世紀末から二〇世紀初頭のウサーヂバ研究「萌芽」段階、という形で行われる。

土地に住み、人生を送る人々にとってごく当たり前の生活環境ならびに意識・観念体系としての文化それ自体を対象化・概念化しようとする試みの実現は、ロシアにおいては西欧に比較してかなり遅れてなされた。むしろ、自らの文化を同時代の共同体が不断に検証し、必要を認めれば口頭で伝承するという文化の基本的メカニズムはロシアでは確実に維持されたので、ここで言う対象化とは例えば文字文化に代表される他者性の自覚化といった意味においてである。したがって言い換えるならば、ロシアを文化として観察し、記述する行為は比較的後世になって着手されたと言える。それを「最初に」おこなったのは主に西欧からロシアを訪問した旅行者であり、かれらが商業・通商や外交交渉の目的でロシアを訪れた際、記述したいというインセンティブにしたがって多くの記録を残したことはその点で注目されるべきである。最近、十五世紀から十八世紀半ばにかけてロシアを訪問した西欧人が書き残した旅行記に関する緻密なモノグラフを発表したマーシャル・ポー（二〇〇〇年）<sup>18</sup>の表現によれば、それらはロシア社会・文化に関する「エスノグラフィ」と呼ぶことができるであろう。ウサーヂバはそれらの旅行記の中でどのように描かれているだろうか。

ほんの数例をあげる。アダム・オレアリウスとアウグスティン・マイエルベルグの旅行記は、十七世紀半ばのロシア社会を知る上で多くの貴重な情報を誤解と偏見も含めて提供してくれる重要な資料として知られている。<sup>19</sup>前者オ

レアリウス（旅行は一六三三—三四年、一六三六年の二度）の旅行記は、ロシア人の細部にわたる行動様式や習俗、さらに「民族性」にまで関わるルポルタージュ的な見聞とコメントリーを多数含み、その後の欧米のロシア（ソ連）観に決定的とも言える影響を与えたとされるゆえんである。また、後者のマイエルベルグは一六六一—六二年のロシア訪問の際の観察をまとめたものだが、特に微細なスケッチが多く、情報を提供してくれる点で貴重である。ともに数ある外国人による旅行記の中でも情報の量と質の上で十七世紀ロシアのみならずロシア中世社会を考察する上で逸することのできない第一級の資料集である。

両者の移動経路について言えば、オレアリウスはリュベック—リガー—モスクワ（一六三三—三四年）、モスクワ（ヴォルガ川経由）—アストラハニ（一六三六年）、マイエルベルグはプスコフ—ノヴゴロド—モスクワとなり、両者はノヴゴロドからモスクワまでの間はまったく同じ道を通って移動したと考えられる。モスクワとその北西に位置するノヴゴロドの間は、この二つの大都市を結ぶ街道沿いということもあって、貴族屋敷としてのウサーヂバが存在して不思議でないし、それを観察しているはずである。しかしながら、ここからオレアリウスとマイエルベルグは微妙な違いを見せる。結論から言えば、オレアリウスが人間関係を中心として行く先々で起こった「事件」に多くの関心を示すのにならして、マイエルベルグはむしろスタティックで、旅行途上の風景や宮廷内部をそこに姿を見せる人々の様子も含めて「冷静に」描写することに大きな特徴がある。それは前者が紀行文に、後者がスケッチに重点を置いていることとも関わっている。

マイエルベルグは、ノヴゴロドからモスクワへの街道沿いで通過した村々を丹念にスケッチし、それに簡単な説明文を付けている。この中で例えば、「モスクワ大公に属する村、トヴェリから六マイル」と説明されるゴロドニャは、実際には十六世紀前半に大貴族ズローピンの領地となり、その後シェレメーチェフ家の、十七世紀半以降オドエフス

キイの領地となった集落である。「モスクワ大公に属する村、シヨシヤから二マイル」のスパスコエは十七世紀後半にコルコジノフの世襲地であったし(十八世紀半ばから一九一七年はフォンヴィーゲン家の所有)、同じく「モスクワ大公に属する村、ベシキから三マイル」のチャシニコヴォは十六世紀末からザハリイン・ユーリエフ、その後一六八〇年までロマノフ家の所有であったし、ニコリスコエは「ある大貴族のダーチャ(別荘)、教会、村」と説明されている。<sup>(20)</sup> これらから見れば、マイエルベルグの描いた図は十八世紀のピョートル大帝による近代化以前から存在したウサーヂバを示すと考えてよい(それは、マイエルベルグの旅行から一世紀半後、アレクサンドル・ラヂーシチェフの経路を逆にして旅行記を残そうとしたプーシキンがマイエルベルグの時代からロシアはまったく変化していないと慨嘆した、あのロシアの農村の農民小屋の光景である)。もっとも、マイエルベルグ自身は、道々の村には立ち寄ったにしても、村や領地屋敷全体をつぶさに時間をかけて観察しているわけではないことは言うまでもない。しかも、注意すべきは、ウサーヂバが人や物が往来する主要な道路沿いに直接面していることがあまり多くなく、街道から「脇に」逸れて、森や茂みに遮られた奥まった場所に潜む文字どおりの「巢」であったことからすれば、幹線道に沿った移動によっては見出されないことである。この意味では、十八世紀後半以後のウサーヂバ文化の急速な成長期においても、ごく一部の例外を除くならば、外国人に代表される外側や外部からの観察者の視線からウサーヂバは「死角」の位置に置かれることがきわめて多かった。むろん都市でもなく、また典型的な農村や広大な平原の風景でもなく、ひっそりと、しかし深い奥行きを持つ時空間であることがウサーヂバの特徴であり、それ故になかなか認知されなかったのである。

十八世紀初頭に始まるピョートル改革により、新興貴族であるドヴォリャニンが国家奉仕への報酬として領地や屋敷を与えられたことはウサーヂバの歴史に新たな一ページを開くこととなった。かれらの邸宅は時として皇帝の宮殿

とも見まがう、それをはるかに凌駕するかの規模と豪華さを示す形で建造され、その屋敷内には庭園なども備えていた。しかもそれらは、新しい首都ペテルブルグの場合、一方で帝都全体の都市計画と調和しつつ市内に作られ、他方で都市近郊の建物として急速に発展していった。メンシコフ、シエレメーチェフらピョートル腹心貴族の邸宅がウサーヂバとして、時に皇居よりも豪華なものとして建設されていった。

一方、旧首都モスクワでは、十八世紀以前の屋敷を残しながらも新たな郊外ウサーヂバ文化が創造されていくこととなった。中世の貴族邸宅を伝統的拠点として残しながらも、それに上乘せする形で新興貴族の屋敷が建造され、全体としてモスクワ近郊に巨大なウサーヂバ・ネットワークが形成されていくこととなった。二大首都のウサーヂバの有り様は、町の歴史自体から見てもまったく異なるものであり、それがまたウサーヂバの全体像をきわめて多様化させることとなったが、その数と規模、そしてイメージから見た時、ペテルブルグ市内・近郊のウサーヂバはむしろ例外的で、モスクワ近郊を中心に中部ロシアに広がるウサーヂバ・ネットワークがイメージとしてのウサーヂバを決定している<sup>(21)</sup>と考えてよい。

十八世紀後半はウサーヂバ文化の開花・全盛期であり、それが一七六二年に発布されたいわゆる貴族自由令<sup>(22)</sup>を直接的契機としたことは改めて述べる必要はない。国家勤務から「解放」され、自分のプライベートな時間の使い方や個人としての生き方・生涯を自身で決められるという、それまでのロシア史とロシア社会ではあり得なかった経験が生まれたのがこの時期であり、この経験を誕生させる上でウサーヂバは不可欠なクロノトポスとなった。

旧来の大貴族（ポヤーリン）ならびに新興貴族（ドヴォリャニン）が、たんなる上流階層の人間でなく、近代国家ロシアにとって真に必要とされるエリートならびにインテリゲンツィヤとして再構築<sup>II</sup>成長していく場として、ロシア的な近代化の枠内でのプライベート意識、個人主義ならびに個が形成される場としてウサーヂバは誕生したのであ

る。そのことの具体的論証については、アンドレイ・ポロトフの生涯とかれの日記・自伝を事例としてその考察によって後述する。冒頭でナポコフに見たメモアールならびに自伝がウサーヂバの時空間と密接に関わるその出発点は、おそらくはポロトフに見出せるのではないか。「文学」の誕生、ロシア近代の核としての個ならびにナロードの姿を含むロシア的風景の成立が時代的にも、また個人としても十八世紀半ばから十九世紀前半を生き抜いたこの博物学者で回想記者者に求められないだろうか、というのが本稿筆者の仮説である。

十八世紀半ば以降に新たに登場した都市ならびに近郊に関する地誌・ガイドブックには、ウサーヂバそのものが詳細に記されているわけではないが、そこには間接的ながらもウサーヂバに該当する郊外の土地についての記述が見られる。例えば、この種の都市誌では最初の試みであるアンドレイ・ボグダーノフの『サンクト・ペテルブルグ記』(一七四九—一七五一年、初版刊行は一七七九年)には、前述したメンシコフの市内中心地のネヴァ川岸(現在のメンシコフ博物館の地)にあるウサーヂバの他、第六四章には「郊外の家」に関する記述がある。それによれば、そこはペテルゴフ街道沿いの海岸地帯で、市内から三〇露里の距離にあり、貴族(ただし主の名前は記載なし)の所有地として多くの住民が住む。集落としては大きく高い建物が見られ、裕福で、ひとつの大きな村にも匹敵する。こうした屋敷は周囲の海岸地帯には多く、その建物数は二百以上にものぼる、といった具合である。また、本格的なロシア民族誌の最初の著者としても知られるヨハン・ゲオルギの『サンクト・ペテルブルグ記』(ロシア語版一七九四年)には、第十五部「ペテルブルグ市近郊地における皇帝ならびに大公の娯楽地ならびにその他の名所」と題され、ウサーヂバという言葉こそ使われていないものの、市周辺の土地の簡単な地誌ならびに住民の生活が紹介されている。<sup>(24)</sup>

こうした都市内部ならびに郊外の土地にたいする地誌的関心は、地名表記そのものに始まり、詳細な記述にまで及ぶが、それはまたジャンルとしての旅行文学の発展とも深く関わっていた。ラヂーシチェフの『ペテルブルグからモ

スクワへの旅』（一七九〇年）が街道沿いの宿場名を掲げたことの意味はこうした時代精神の中に求められる。そして、その背後には、巨大な帝国へと変貌しつつあったロシア社会がペテルブルグとモスクワを中心に急速に都市化していく中で、田園と自然への憧れが肥大化し、その一方で両首都の郊外が成立していく時代の展開が存在していた。プーシキンの『エヴゲニイ・オネーギン』に描き出された貴族の典型的な田舎生活、日常生活と習俗は、ウサーヂバが置かれていたこうした時代経験が生み出したものであった。

### 三 十九世紀末まで

『エヴゲニイ・オネーギン』が十八世紀末から十九世紀初頭のウサーヂバを主な舞台としていることの文化史的意味に関しては、すでにあげたロートマンの「オネーギン時代の貴族の習俗」（一九八三年）が貴族生活の全体像に関する基本的情報を提供しながらも具体的かつ啓蒙的に述べているとおりである。ロートマンの成果はウサーヂバのみを対象としているわけではない。しかしながら、貴族習俗文化の根幹を形成しているのがウサーヂバの場であることを改めて確認しただけでなく、文学作品としての『オネーギン』がウサーヂバ研究にとってきわめて重要なテクストとなることを示した点でロートマンの仕事の意味は大きい。文学が時代とその習俗にたいするもっとも敏感な記述であることがウサーヂバの場合にも証明されたことになるからである。

この点に関して、ロシア史研究所編『ロシアにおける貴族・商人ウサーヂバ』は明確に次のように指摘する。「ウサーヂバへの学問的関心が最初に現れたのは十九世紀後半であり、この点で少なからぬ役割を果たしたのは文学だった<sup>(25)</sup>」。ただし、ここで言及されている十九世紀後半という時代に関しては若干の補足が必要である。というのも、学問的関心をいかに理解するかという点で、また、『オネーギン』の出版年代との関わりから見てもウサーヂバを記

述対象としよとすまなざしは十九世紀前半に現れていたからである。例えば、一八二〇―三〇年代の都市案内として知られる『モスクワ、あるいはロシア国家の著明な首都の歴史的案内』（全四巻、一八二七、一八三一年）の巻末には、郊外の娯楽地として一〇ヶ所があげられ、それらについてごく簡単に各四、五行の説明があり、特に有名なウサーヂバとしてコロメンスコエ、クジミンキ、クスコヴォ、オスタンキノ、ツァリーツイノが紹介されるのである。<sup>26</sup> こうした都市案内は、一八三〇年代以降顕著になった都市観察的・「生理学的」な記述として一種ジャーナリスティックな関心にもとづくものであったが、こうした関心もウサーヂバにたいする視線を生むこととなった。さらに、十八世紀末からナロードノエ・グリヤーニエと呼ばれるロシア風縁日がペテルブルグ、モスクワその他の地方都市の広場や氷上で定期的に開催されるようになり、その盛大さとイベント性から一般庶民の日常に深く浸透し、都市生活に不可欠な大衆娯楽となったが、その様子がルポルタージュや町案内書に書かれるようになった。このグリヤーニエは時に、都市郊外のウサーヂバ内やその周辺の空間、また、市内のウサーヂバで庶民に「開放」する形で行われることもあったので、それらの娯楽の記述がさらにウサーヂバへの関心を高めることにもなっていた。パーヴェル・ヴィステンゴフ『モスクワ生活概観』（一八四二年）やセルゲイ・リュベーツキイ「モスクワの新旧グリヤーニエと娯楽」（一八五四―五五年）はモスクワのグリヤーニエ研究にとって初期の基礎的文献であるが、同時にウサーヂバについての言及も見逃すことができない。特に後者の『オスタンキノ村とその周辺』（一八六八年）、『歴史ならびに現代のダーチャ、グリヤーニエの選択から見たモスクワ周辺地』（二版、一八八〇年）はウサーヂバ記述の好例である。

時代が少し先行したが、十九世紀半ばにかけての時代は、こうした郊外も含めた都市誌・都市観察が時代のもっとも先端的な記述ジャンルを生み出し、発展させていった。その一方で、世紀半ば以後には貴族階級を中心とする文化が最盛期を過ぎてその時代的求心力も徐々に失われていく。「貴族の巢」が衰退し、ウサーヂバも富裕商人や企業家

の手へ移ることが多く見られ、華麗なウサーヂバへの接待やそこでの祝祭、花火なども廃れていくようになっていく。そうした時代のなかで、衰えゆくウサーヂバへのオマーージュとして書かれたイヴァン・ツルゲーネフのロマンはウサーヂバへの社会的関心を高める役割を果たしたと言えるだろう。ここでも、プーシキン『オネーギン』の場合とは逆方向ではあるが、文学が時代とウサーヂバの関係性を明確に記すこととなるのである。

一八七〇年代に出版された都市ガイドブックには、ウサーヂバに関する情報が必ず含まれるようになっていた。『ボケットの中の全モスクワ』（一八七三年）、ニコライ・コンドラチエフ『モスクワの昔』（一八九三年）など枚挙にいとまがない。例えば後者には、「モスクワ周辺」として、アルハンゲリスコエ、イズマイロヴォ、コロメンスコエ、クジミンキ、クスコヴォ、オスタンキノ、ツァリーツィノといった現代も代表的ウサーヂバとして知られるすべての場所が紹介されるのである。このほか、個々のウサーヂバの歴史ならびに地誌をまとめた一種の郷土史的著作も次々と刊行された（ズヴェノフ『ヴラヘルンスコエ村』（一八四六年）、コルサコフ『コロメンスコエ村』（一八七〇年）、イヴァン・ザベーリン『クンツェヴォ』（一八七三年））。そして、こうした地誌的な記述と並行する形で、ウサーヂバの時空間における自分自身ならびに家族の生活を詳細に記述した回想録の出版が相次いだことも重要である。エリザヴェータ・ヤニコヴァの『孫のブラゴヴォが集めた五世代の回想からなるお婆さんの話』（一八八五年）、そして前述したポロトフによる膨大な手記『アンドレイ・ポロトフが子孫のために記したかれの生涯と出来事』（一八七一一八七三年）がその例であり、ともにロシア・メモリアル文学の金字塔ともされる著作である。<sup>28)</sup>

十九世紀末から二十世紀初頭にかけての時代の転換は、急激な資本主義的発展と市場経済の成長のなかでウサーヂバの「黄金期」を崩壊させていくことになった。そのことは冒頭のナボコフ、チュエーホフの言及ですで見たとおりである。ウサーヂバ「解体」の予感<sup>29)</sup>は逆に関心の高まりをもたらすこととなった。詳細は次の節に譲るが、その見取

り図のみを書いておく。

セミヨーノフ・チャン・シヤンスキイらの編纂による『ロシア。祖国の完全な地理学的記述』（全十九巻、一八九九—一九一三年）は、帝室ロシア地理学協会によるロシア帝国全土の完全な記述の「公式的な」報告書である。ここには、ウサーヂバを含む領地の農業・手工業の産業面での機能と役割、その歴史的発展を中心として、さらに絵画、文学など芸術分野にも注目しながら、短いながらもウサーヂバに関する記述が見られる。<sup>(29)</sup>

こうした「上からの」報告とは別に、ウサーヂバを過去の文化遺産としてとらえる方向も顕著に見られるようになった。セルゲイ・シエレメーチェフ、ルコムスキイらがウサーヂバを「ロシア文化の現象」として、その物質的・精神的価値を高く評価し、古物・芸術愛好家のための雑誌『芸術世界』（一八九九—一九〇四年）、『昔の日々』（一九〇七—一九一六年）、『首都とウサーヂバ』（一九一三—一九一七年）などの定期刊行物が相次いで出版されることとなった。特に、これら雑誌に掲載されたウサーヂバに関する多数の記事が現在においてもウサーヂバ学のもっとも基礎的な研究であることを疑う者はいない。そして、このようなウサーヂバへの関心の高まりのなかから、建築学、美術史、庭園学、文学研究、音楽学、演劇学、歴史学、地誌、そして都市研究など多様な分野にまたがるウサーヂバと正面から向き合う研究がニコライ・ヴランゲリをはじめとして、セルゲイ・シエレメーチェフ、ルコムスキイ兄弟らにより開始されることになった。特に、雑誌『昔の歳月』の一九一〇年七月九月号に発表されたヴランゲリの論考「地主のロシア」はウサーヂバ研究開始の宣言として画期的な著作と呼べるであろう。<sup>(30)</sup>次に、この論考ならびにかれの仕事について述べる。

註

- (1) ドミトリ・ナボコフ／マシュー・J・ブルツコリ編『ナボコフ書簡集一一九五九―一九七七』三宅昭良訳、みすず書房、二〇〇〇年、四三四―四三六ページ。
- (2) 同右、四三五―四三六ページ。
- (3) これらの土地ならびにウサーヂバの歴史に関しては、ナボコフ生誕百年記念として刊行された『ナボコフ通報第三冊一族の果』（一九九九年）に掲載された諸論文に詳しい。巻末には多数の貴重な写真もある。
- (4) ウラジミール・ナボコフ『ナボコフ自伝 記憶よ、語れ』大津栄一郎訳、晶文社、一九七九年、十一―十二ページ。
- (5) 同右、十二ページ。
- (6) 同右、一七〇―一七二ページ。
- (7) ブライアン・ヴォイド『ウラジミール・ナボコフ ロシア時代』プリンストン大学出版、一九九〇年、四五―五二ページ。ロシア文学における自伝ならびに記憶に関しては多数の文献があるが、この問題をナボコフを中心として論じた最新の成果は、ボリス・アヴェーリン『ムネーモシユネーの賜物。ロシア自伝伝統のコンテクストにおけるナボコフのロマン』ペテルブルグ、二〇〇三年。
- (8) ブーニンでは自伝の『アルセーニエフの生涯』、『村』、『ミーチャの愛』、『アントーノフカのリンゴ』など、チェーホフは『桜の園』、短編小説で『生まれ故郷で』、『すぐり』をはじめとして枚挙にいとまがない。
- (9) 『十六―二〇世紀ロシアにおける貴族と商人の農村ウサーヂバ。歴史的概説』モスクワ、二〇〇一年、四九―五二ページ。
- (10) ソ連邦科学アカデミー・ロシア語研究所『現代ロシア語標準辞典、第十六巻』モスクワ・レニングラード、一九六四年、八五―一八五三ページ。
- (11) ウラヂミール・ダリー『生きた大ロシア語詳解辞典、第四版改訂版、第四巻』ペテルブルグ・モスクワ、一九二二年、一〇六―五二ページ。
- (12) 『祖國の歴史』二〇〇二年第五号、一三三―三三二ページ。

- (13) 拙稿「ロシア民衆文化史研究の諸問題(上)」『一橋論叢』二二七巻三号(二〇〇二年三月号)。
- (14) アレクセイ・コプイロフ「絶対主義開花の時代のロシア文化」——『ソビエト著者の研究に見る九—十八世紀ロシア文化』モスクワ、一九九〇年。
- (15) ボリス・クラスノバエフ『十七世紀後半—十九世紀初頭のロシア文化』モスクワ、一九八三年。
- (16) シグルト・シュミット『十七—十九世紀三十年代ロシアの高貴身分の社会的自己意識』モスクワ、二〇〇二年、に所収。
- (17) E・マラシーノヴァ『十八世紀最終第三期ロシア貴族エリート心理』モスクワ、一九九九年。
- (18) マーシャル・ポー『奴隷に生まれた人々。近世ヨーロッパ・エスノグラフィにおけるロシア、一四七六—一七四八年』コネル大学出版、二〇〇〇年。
- (19) アダム・オレアリウス『モスコヴィヤへの旅、モスコヴィヤからベルシャへ、その逆の旅』ペテルブルグ、一九〇六年(ロシア語版)、初版は二六四六年刊。『マイエルベルグ・アルバム。十七世紀ロシアの風景と風俗画』ペテルブルグ、一九〇三年(ロシア語版)、初版は一六六四年刊。
- (20) マイエルベルグのアルバムには、同じ街道沿いでモスクワ近郊のクリン、モシニツイ、ベシキなどの村のスケッチもあるが、それらも先にあげた村と区別なく、屋敷と同義である。
- (21) モスクワ近郊のウサーヂバを一覧して詳細な地図と案内をまとめた最近成果は、A・チソコフ『モスクワ郊外のウサーヂバの今日』モスクワ、二〇〇〇年。ここには五八二のウサーヂバの簡潔なデータが記載されている。
- (22) 「貴族自由令」に関する最新の研究は、イリーナ・ファイゾヴァ『自由に関するマニフェスト』と十八世紀貴族の勤務』モスクワ、一九九九年。
- (23) アンドレイ・ボグダノフ『サンクト・ペテルブルグ記、一七四九—一七五一年』ペテルブルグ、一九九七年、二二六—二二七ページ。
- (24) ヨハン・ゲオルギ『サンクト・ペテルブルグ記』サンクト・ペテルブルグ、一七九四年(ロシア語版)、六六三—七三二ページ。

- (25) 『十六―二〇世紀ロシアにおける貴族と商人の農村ウサーヂバ。歴史的概説』、十四ページ。
- (26) 『モスクワ、あるいはロシア国家の著明な首都の歴史的案内』全四巻、モスクワ、一八二七、一八三一年。
- (27) 拙稿「ソビエトにおけるナロードノエ・グリャーニエ（民衆遊歩）研究の現段階と今後の方向」『一橋論叢』八九巻五号、を参照。リュベツキイに関しては、B・ソローキンによる「モスクワの昔、セルゲイ・リュベツキイ」、『モスクワの郷土研究者』モスクワ、一九九一年、所収）が詳しい。
- (28) 前者が一九八九年、後者が一九八六、一九九三年など、近年に再版されている。
- (29) 『ロシア。祖国の完全な地理学的記述。全十九巻』ペテルブルグ、一八九九―一九一三年。
- (30) この論文は、『祖国の記念碑』誌（一九九二年、第二五号、特集「ロシア・ウサーヂバの世界」）に掲載され、さらに一九九二、二〇〇〇年と相次いで出版されたウランゲリの『昔のウサーヂバ』に収録されている。また、革命期までのウサーヂバ研究の概観は、ガロリド・ズロチェフスキイ「革命前出版物のページに見るロシアのウサーヂバ」（『祖国の記念碑』一九九二年、二五号に収録）によってできる。

#### 文献目録

（以下では、本稿冒頭に記した全体で三章からなる「序説」の第二、第三章に関わるものを除き、第一章に関連するものをあげた）

- Аверин В. В. Дар мнемозины. Романы Набокова в контексте русской автобиографической традиции. СПб., 2003.
- Александров В. А. Сельская община в России (17-начало 19 в.). М., 1976.
- Алексеева Т. В./ред./ Русское искусство 18 века. Материалы и исследования. М., 1973.
- Анист М. А., Турчин В. С./сост./... в окрестностях Москвы. Из истории русской усадьбной культуры 17-19 веков. М., 1979.

- Архитектура русской усадьбы. М., 1998.
- Байбурова Р. М. Русский усадебный интерьер эпохи классицизма. В сб. ; Памятники русской архитектуры и монументального искусства. М., 1980.
- Её же Русский усадебный дом середины 18 века как элемент развлекательной культуры Барокко. В сб. ; Развлекательная культура России 18-19 вв. Очерки истории и теории. СПб., 2000.
- Баранова О. Кусково. М., 1982.
- Беловинский Л. В. Изба и хоромы : Из истории русской повседневности. М., 2002.
- Бенуа А. Н. Мои воспоминания в пяти книгах. М., 1980.
- Благово Д. Рассказы бабушки. Из воспоминаний пяти поколений, записанных и собранных ее внуком. Л., 1989.
- Богданов А. И. Описание Санктпетербурга. 1749-1751. СПб., 1997.
- Вергунов А. П., Горохов В. А. Русские сады и парки. М., 1987.
- Их же Вертоград. Садово-парковое искусство России. М., 1996.
- Верещагин В. Памяти Врангеля. В журнале ; Старые годы. 1915, июнь.
- Водарский Я. Е. Население России в конце 17-начале 19 века. М., 1977.
- Его же Дворянское землевладение в России в 17-первой половине 19 в. М., 1988.
- Врангель Н. Н. Старые усадьбы : Очерки истории русской дворянской культуры. СПб., 1999, 2000.
- Его же Помещиная Россия. (1910) В кн. ; Старые усадьбы : Очерки истории русской дворянской культуры. СПб., 1999, 2000.
- Его же Дни скорби. Дневники 1914-1915 гг. СПб., 2001.
- Его же Свойства века. Статьи по истории русского искусства. СПб., 2001.
- Гаген Т. Дом с колоннами. В альманахе ; Памятники Отчества. No. 25 1992.

- Гейрот А. Ф. Описание Петергофа. СПб., 1868 (Репринтное издание СПб., 1991).
- Георги И. Г. Описание российско-императорского столичного города САНКТ-ПЕТЕРБУРГА и достопамятностей в окрестностях оного, с планом. СПб., 1996.
- Горбатенко С. Б. Петергофская дорога. Ораниенбаумский историко-ландшафтный комплекс. СПб., 2001.
- Его же Петергофская дорога. Историко-архитектурный путеводитель. СПб., 2002.
- Гревс И. М. Новое для изучения окрестностей столиц. Краеведение, 1929, т. 6, No. 3.
- Дворянская и купеческая сельская усадьба в России 16–19 вв. Исторические очерки. М., 2001.
- Дедюхина В. С. Культура дворянской усадьбы. В кн.; Очерки русской культуры 18 в. Ч. 4. М., 1990.
- Дмитриева Е. Е. Купцова О. Н. Жизнь усадебного мифа: утраченный и обретенный рай. М., 2003.
- Домников С. Д. Мать-земля и царь-город. Россия как традиционное общество. М., 2002.
- Евангулова О. С. Город и усадьба второй половины 18 в. в сознании современников. В сб.; Русский город. Вып. 7. М., 1984.
- Ее же Художественная вселенная русской усадьбы. М., 2003.
- Евсина Н. А. Архитектурная теория в России второй половины 18-начала 19 века. М., 1985.
- Ее же Интерьер. В сб.; Русская художественная культура второй половины 19 века. М., 1988.
- Завьялова Н. И. Усадьба Середниково («Лермонтовские места») М., 2002.
- Злочевский Г. Д. Русская усадьба на страницах дореволюционных изданий. В сб.; Памятники Отечества. No. 25, 1992.
- Его же Общество изучения русской усадьбы. (1922–1930) М., 2002.
- Иванова Л. В. Два юбилея. В сб.; Русская усадьба. Вып. 4 (20). М., 1998.
- Игра и страсть в русском изобразительном искусстве. СПб., 1999.

- Ильин М. А. Подмосковье. М., 1966.
- Его же К вопросу о русских усадьбах 18 в. В сб.; Русский город. Вып. 4. М., 1981.
- Истомина Э. Г., Полякова М. А. Русская усадебная культура: проблемы и перспективы. В сб.; Источники по истории русской усадебной культуры. Ясная Поляна, М., 1997.
- Источники по истории русской усадебной культуры. Ясная Поляна, М., 1997.
- Кабузан В. М., Троицкий С. М. Изменения в численности, удельном весе и размещении дворянства в России в 1782-1858 гг. История СССР, 1971 No. 4
- Каждан Т. П. Художественный мир русской усадьбы. М., 1997.
- Ее же Личность художника в усадебном мире. Чехов в Мелихове. В сб.; Русская художественная культура второй половины 19 века. М., 1996.
- Каждан Т. П., Марасинова Е. Н. Культура русской усадьбы. В сб.; Очерки русской культуры 19 в. Т. 1. М., 1998.
- Кириченко Е. И. Запечатленная история России. М., 2001.
- Его же Русская усадьба в контексте культуры и зодчества второй половины 18 в. В сб.; Русская усадьба. Вып. 1 (17). М., Рыбинск, 1994.
- Конечный А. М. Быт и зрелищная культура Санкт-Петербурга-Петрограда. 18-начало 20 века. Материалы к библиографии. СПб., 1997.
- Копылов А. Н. Русская культура 18 века в советской историографии начала 80-х годов. Основные аспекты и тенденции изучения. В сб. ст.: Вопросы истории русской культуры в отечественной и зарубежной историографии. М., 1986.
- Копылов А. Н./отв. ред./ Русская культура 9-18 веков в исследованиях советских авторов 1917-1984 гг. М., 1990.
- Коробко М. Ю. Кузьминки. М., 2002.

- Короткова М. В. Путешествие в историю русского быта. М., 1998.
- Колшалева О. Е. (Свое детство) в древней Руси и в России эпохи просвещения (16–18 вв.). М., 2000.
- Краеведы Москвы I. М., 1991.
- Краснобаев В. И. Русская культура второй половины 17-начала 19 в. М., 1983.
- Бро же Очерки истории русской культуры 18 века. М., 1987.
- Лебедев А. В. Тшанием и усердием. Примитив в России 18-середины 19 века. М., 1997.
- Деягин Л. Н. Русская усадьба: миф, мир, судьба. В сб.: Русская усадьба. Вып. 4 (20). М., 1998.
- Дихачев Д. С. Поэзия садов. К семантике садово-парковых стилей. Л., 1982.
- (マシタリイ・セルゲエヴィチ・リンチョフ 『庭園の詩学——ヨーロッパ・ロシア文化の意味論的分析』坂内知子訳 一九八七年、平凡社)
- Дотман Ю. М. Пушкин. Биография писателя. Статьи и заметки 1960-1990. (Евгений Онегин). Комментарий. СПб., 1995.
- Бро же Веселы о русской культуре. Быт и традиции русского дворянства (18-начало 19 века). СПб., 1994.
- (ナトリー・ミンノロウイチ・ローヤマン 『ロシア貴族』桑野隆・梶月哲男・渡辺雅司訳、一九九七年、筑摩書房)
- Любчикий С. М. Село Останкино с окрестностями своими: Воспоминание о старинных празднествах, забавах и увеселениях в нем. М., 1868.
- Бро же Старина Москвы и русского народа в историческом отношении с бытового жизнью русских. М., 1872.
- Маликова М. Э. В. Набоков. Авто-био-графия. СПб., 2002.
- Марасинова Е. Н. Психология элиты российского дворянства последней трети 18 века. М., 1999.
- Марченко Н. Приметы милой старины. Нравы и быт пушкинской эпохи. М., 2001.
- Мир русской провинции и провинциальная культура. СПб., 1997.

- Мир русской усадьбы. Каталог. М., 1995.
- Мир русской усадьбы. Очерки. М., 1995.
- Миронов Б. Н. Социальная история России. Т. 1-2. СПб., 1999.
- Муравьева О. С. Как воспитывали русского дворянина. М., 1998.
- Мурашова Н. В., Мыслина Л. П. Дворянские усадьбы Санкт-Петербургской губернии. Ломоносовский район. СПб., 1999.
- Их же Дворянские усадьбы Санкт-Петербургской губернии. Лужский район. СПб., 2001.
- Набоковский Вестник. Выпуск 3. Родовые гнезда. СПб., 1999.
- Нащокина М. В. /ред./ Дворянские гнёзда России. История, культура, архитектура. М., 2000.
- Овсянников Ю. М. Картины русского быта. Стили, нравы, этикет. М., 2000.
- Памятники Отчества. No. 25 1992. Мир русской усадьбы.
- Подмосковные. М., 1946.
- Примитив в России. Каталог. М., 1995.
- Пыляев М. И. Забытое прошлое окрестностей Петербурга. СПб., 1889.
- Развлекательная культура России 18-19 вв. Очерки истории и теории. СПб., 2000.
- Рапацкая Л. А. Русское искусство 18 века. М., 1995.
- Русская усадьба. Вып. 1 (17). М., Рыбинск, 1994.
- Русская усадьба. Вып. 2 (18). М., 1996.
- Русская усадьба. Вып. 3 (19). М., 1997.
- Русская усадьба. Вып. 4 (20). М., 1998.
- Русская усадьба. Вып. 5 (21). М., 1999.

Русская усадьба. Вып. 6 (22). М., 2000.

Русская усадьба. Вып. 7 (23). М., 2001.

Русская усадьба на пороге 21 века. Хмелитский сборник. Выпуск 3, Смоленск, 2001.

Сергеев И. Н. Царицыно. М., 1995.

Смилянская Е. Б. Дворянское гнездо середины 18 в. М., 1998.

Стернин Г. Ю. Усадьба в поэтике русской культуры. В сб.; Русская усадьба. Вып. 1 (17). М., Рыбинск, 1994.

Тартаковский А. Г. Русская мемуаристика 18-первой половины 19 вв. М., 1991.

Тихомиров Н. Архитектура подмосковных усадеб. М., 1955.

Тихонов Ю. А. Дворянская сельская усадьба близ Москвы и Санкт-Петербурга в 18 веке. Отечественная история. 1998, No. 2.

Усадьбы южного подмосковья. Подольск, 2000.

Фаизова И. В. «Манифест о вольности» и служба дворянства в 18 столетии. М., 1999.

Федоров В. А. Помещичьи крестьяне центрально-промышленного района России конца 18-первой половины 19 в. М., 1974.

Федоров-Давыдов А. А. Формирование нового восприятия природы (1953). В его кн.; Русский пейзаж 18-начала 20 века. М., 1986.

Хренов Н. А. Мифология досуга. М., 1998.

Чернышев В. И. Усадьбы России. М., 1992.

Чижков А. Б. Подмосковные усадьбы сегодня. Путеводитель с картой-схемой. М., 2000.

Шмидт С. О. Общественное самосознание российского благородного сословия, 17-первая треть 19 века. М., 2002.

Шукин В. Г. Поэзия усадьбы и проза трущобы. (1994) В кн.; Из истории русской культуры. Т. 5 (19 век). М., 1996.

- Его же Миф дворянского гнезда. Краков, 1997.
- Шукина Е. П. 《Натуральный сад》 русской усадьбы в конце 18 в. В сб.: Алексеева Т. В. / ред./ 1973. <http://www.fovrus.ru>
- Billington J. H. The Icon and the Axe. An Interpretive History of Russian Culture. New York, 1966.  
 (シノードキス・ロ・ユリオンケン『肖像画と十字架——ロシア文化史論』藤野幸雄訳、二〇〇〇年、勉誠出版)
- Boyd B. Vladimir Nabokov. The Russian Years. Princeton, 1990.  
 (ボ・ネベヌ『ナボコフのロシア年』藤野幸雄訳、二〇〇三年、みちが丘社)
- Dixon S. The Modernisation of Russia 1676-1825. Cambridge, 1999.
- Jones R. E. Urban Planning and the Development of Provincial Towns in Russia, 1762-1796. In Garrard J. G. (ed.) The Eighteenth Century in Russia. Oxford, 1973.
- Lovell S. Summerfolk. A History of the Dacha, 1700-2000. Cornell UP, 2003.
- Nabokov V. Speak, Memory. Autobiography revised. N. Y., London, 1999.
- Poe M. T. 《A People Born to Slavery》 Russia in Early Modern European Ethnography, 1476-1748. Ithaca, London, 2000.
- Raeff M. Origins of Russian Intelligentsia, The Eighteenth-Century Nobility. New York, 1966.
- Rogger H. National Consciousness in Eighteenth-Century Russia. Cambridge, 1960.
- Roosevelt P. Life on the Russian Country Estate. A Social and Cultural History. New Haven and London, 1985.
- レイモンズ・ウィリアムズ『田舎と都会』山本和平・増田秀男・小川雅魚訳、晶文社、一九八五年
- 『ナボコフ自伝——記憶よ、語れ』大津栄一郎訳、晶文社、一九七九年
- 『ナボコフ書簡集(一)(二)』エミナリ・ナボコフ／マッシュー・J・ブルッコリ編、江田孝臣・三宅昭良訳、みすず書房、二〇〇〇年

坂内徳明 「ソビエトにおけるナロードノエ・グリャーニエ（民衆遊歩）研究の現段階と今後の方向」『一橋論叢』八九巻五号、一九八三年

同 「アレクサンドル・ラヂーシチェフ『ベテルブルグからモスクワへの旅』の時代」『一橋大学研究年報 人文科学研究』三八、二〇〇一年

同 「ロシア民衆文化史研究の諸問題（上）」『一橋論叢』一二七巻三号、二〇〇二年  
マルク・ラエフ 『ロシア史を読む』石井規衛訳、名古屋大学出版会、二〇〇一年

（本稿は財団法人三菱財団人文科学研究助成による成果の一部である）